

特集

イスラームと宗教研究

編集意図

過去二年間の特集号では、『生活の宗教』としての仏教」「生活の宗教』としてのキリスト教」をテーマとした。今回のテーマを定めるにあたって、この企画を引き継ぎ、『生活の宗教』としてのイスラーム」とする案がまづ出された。しかし、これについては、「イスラームは西洋的意での『宗教』ではなく、『イスラム教』という表記は不適切であるとされている。この場合、仏教・キリスト教と同様に『生活の宗教』を設定することは妥当なのか」という疑問が挙げた。また、緊迫した国際情勢に直接応答するテーマの方が時宜にかなうという意見もあった。反対にイスラーム特集だからといって戦争やテロを主題化するのは偏見ではないかという意見もあった。

ふり返るならば、過去二回にわたって『生活の宗教』というテーマを掲げたのは、これまでの仏教やキリスト教の研究が教義・思想研究を中心としてきたことに対し、日常的な信者の姿をとらえる研究の地平を切り開くという意図によるものであった。それは「思想・文献研究」から「地域研究・人類学的研究」へ転換すれば済むことではなく、むしろ、そのような二者択一の枠組みに留まらない研究を模索するものであった。言い換えれば、仏教とキリスト教の宗教学的な個別宗教史研究——「宗教学」とは何かについての自省も含めつつ——の可能性を問う試

編集委員会

みだった。

そこで編集委員会は、この意図に対してイスラーム研究はどう位置づけられるかを研究者に問いかけた。それは同時に、イスラーム研究と宗教学が『宗教研究』という共通の場で、今までに何を築いてきたのか、今後何を新たに築くことができるのかを問うことともなった。宗教学からイスラーム研究に対してはどのような貢献がなされてきたのか。反対に、イスラーム研究の視点からは、従来の宗教学の概念・理論、あるいは比較研究にはどのような歪みがあるとされるのか。こうした根本的な問題に、理論的・方法論的に答えるものから、具体的な事例の分析が答えとなるものまで多数の論文が寄せられた。

〔「イスラーム」「イスラム」等の表記については、編集委員会では統一せず、各執筆者の原稿通りとした。〕